



9

7保3
2.564



驛路鈴考引用書目

養老令

内闡書

延喜式

百練抄

萬葉集

堀川院百首和哥

源平盛衰記

驛鈴圖

同義解

内裏儀式

續日本紀

禁秘抄

仙覺抄

平家物語

正等寺所藏并林氏贊

已上三只

明治三十九年六月二十一日
市島館七



驛路鈴考

亦單此也
並身官牌無大官牌
二口其三關圖各給關牌二枚
皆論也
三關及智與道各四口大土國

職令

中務省之下

日大主鈴二人掌出納鈴仰傳符飛

眠丞鈴

少主鈴二人掌内大主鈴

公式令曰凡給驛傳馬皆依鈴傳符尅數事速者一

日十驛以上事緩者八驛還日事緩者六驛以下解

日謂四驛以上依文二驛為差故也親王及一位驛鈴十尅傳符三十

尅三位以上驛鈴八尅傳符二十尅四位驛鈴六尅

傳符十二尅五位驛鈴五尅傳符十尅八位以上驛



既收令曰凡諸道須置驛者每三十里置一驛雜令曰凡度地五人馬步三百步為里

數字下印本有
外字術也古本
無外字

集解作使納
印本作侵納

軍防令曰二關
義解曰伊勢鈴
鹿美濃不破越
前愛發等是也

公式令義解曰
天子巡行太子
留守是為監國
公式令曰諸進
鈴印及賜衣服
塩酒菜食並給
醫藥如此小事
之類為使卷

鈴字下之印是
下于諸國之公
文檢之也所謂
內印也官印府
太政官之案及
六位以下位記
檢之所謂外印
也見于公式令

數別給驛子一人

義解曰謂驛子驛馬為先行者凡驛家者人馬必相從故雖文不云

人馬共給也文云驛子不言傳

其六位以下隨事

子即明數外亦不可給傳子也

增減但此令每四尉給若應增給者即尉其所乘之

給尉而不必限數其驛鈴傳符還到二日之內送納

日謂還到於京送納日限其案唐令使事未畢之問

使納所到官司今於此令既除其文故知使人在國

之間仍合隨身也

又曰允諸國給鈴者義解曰謂其尉數

義解曰謂管內諸者依式處分也

三口中下國二口其三關國各給關契二枚

義解曰謂其作

契之形制者須有別式師

下條隨身符亦準此也

並長官執無次官執

義解曰謂留

又曰允車駕巡幸京師留守官給鈴契

義解曰謂留

子若不在此者餘官留守者亦是也給鈴契者案唐令

不給內印但有事應用鈴契者吏副官符行下其依

上條太子監國之日唯得用勅旨及使奏以外大事

不得施行此據尋常之時不由非掌之變若有軍機

急速應處分兵馬者多少臨時量給

不扞怪法亦得兼行

職負令曰少納言三人掌奏宣小事

義解曰謂公武

印及賜衣服如此請進鈴印傳符進付飛驒函鈴兼

少事之類是也

監官印其義解曰謂唯得監視印

貞文曰中勢者依律長君執掌也

函鈴ヲ出シ納ル事ヲ掌ル少鈴ハ印傳符飛驒

在リ彼鈴傳符以下ノ物ヲ賜テ主鈴ニ仰テ其

ク其事ヲ仰スレハ中務省兼テ主鈴ニ仰テ其

事ヲ奉任セシム少納言ハ其場ニテ其事ヲ監
視ス監視ハ見テ居ル也今俗ニ目付ト云ニ同

又其鈴傳符以下ノ物ヲ
返納スル時モ右ニ同シ

令聞書一條撰政冬良公之說曰少納言、一納言ノ名

ハ大納言ト同シケレ氏是ハ少事ヲツカサトル

ニ依テ少納言ト云ヘリ注ニ請進鈴印及賜衣服

如此少事ヲ掌也請進鈴、一鈴ハ驛路ノス、也

君ノ使ニ遠ク行時鈴ヲ賜ヒ又官符ヲ給フ其鈴ニ

キサミヲ數アリ其キサミノ數ニ依テ驛路ノ馬

ニノリテ鈴ヲ振テ遠ヲ經ルナリ傳ノ符ト云ハ

傳馬ヲ云也此符、モキサミノ數アリテ其數ニ

依テ傳馬ニソル驛ノ馬ハ善馬傳馬ハ次ハ馬也

是等ノ官符鈴印ナトハ少納言奉行スル也賜フ

時モ又返奉ル時モコレ歟ヨテ請進トハ云ヘリ進付

飛、一飛驒ト云ハ國ニ急事ノ有時ニ早馬ヲ

タツル事アルヲ云也サテ飛驒トハ云也其時モ

文宮ニ鈴ヲ入テ給也木契ト云テ木ニキサミヲ

シテ其キサミノ數驛ノ馬ニ乗ナリ其書函ニ木

契鈴ナトヲ入ル、也下畧

貞丈案右聞書ニ驛鈴ノ尅數モ傳符ノ尅數モ
共ニ馬ノ數トシ善馬次ノ馬ノ差別アリトス
然ラハ人夫ノ數ヲハ何ニ依テ定メンヤ是ハ
義解ノ驛子傳子ノ文義ヲ見誤レル也或說ニ

驛鈴十剋ハ馬十足ヲ出ス各驛子一人副フ傳符三十剋ハ入夫三十人ヲ出ス傳子是也餘ハ是ニ效ヘト云ヘリ此說善シ又聞書ニ書函ニ鈴木契傳符ナトヲ入テ給フトアルモ誤也令ニモ式ニ見エス延喜木工寮式ニ飛驒函ノ寸法アリ記五ニ大ナル管ニ非レハ書問ト傳符ト三物ハ入カタル可シ且延喜内記式ニ飛驒函ヲ封スル事アリ記左ニ鈴傳符ヲ至テ入テ封シテハ取出ス事ナラズ驛舎ニ至テ何ヲ證ニシテ人馬ヲ出サシメシヤ函ニハ勅符ノ文書ヲ納テ固ク封シ別ニ驛鈴傳符ヲ相副テ給ルヲ飛驒函鈴ト云也

延喜木工寮式曰飛驒函長一尺一寸六分廣三寸深二寸三分

同主鈴式曰凡行李從駕内卯并驛鈴傳符等皆納

漆簾子主鈴與少納言共預供奉其馱者左右馬寮

充之 又曰凡飛驒并驛傳函及遣渤海國勅書太

政官牒者主鈴封之

同内記式曰凡在外官飛驒奏事者大臣奏畢即令

内記作勅符大臣自持昇殿上奏覽畢少納言中務

輔内記主鈴等請卯封函發遣事見儀式

同中務省式曰凡在外官上飛驒函者少納言奏進

若不在者見在函已上奏進其報下飛驒者少納言

并輔已上一人内記二人共入内裏行事筆見儀式

内裏儀式少納言尋日皇帝御紫宸殿時左近衛府

將監一人引近衛一人開左掖門佗持大舍人詣延

政門叩門少納言付奏案於圍司ニニ就位奏云少

納言姓名 我甲給須留政乃案文奉止申勅曰將來
升自南階進差退侍御覽說勅曰令申圍司傳宜云
姓名等乎令申掃部寮立漆案於版下少納言就位
奏曰太政官奏々某國某使等乃進禮留若于剋乃
鈴若于口若于剋傳符若于枚進止申勅曰収之稱
唯又曰某事亦縁互某國某人亦給若于剋鈴若于
口若于剋傳符若于枚官符若于枚亦即賜止奏勅曰取之
口傳符若于枚官符若于枚亦即賜止奏勅曰取之
稱唯喚主鈴石主鈴稱唯少納言退立廊前主鈴就
擲取即少納言引復就位主鈴搥之少納言監之說

奏云即搥都勅曰給部少納言稱唯引主鈴収即退
出掃部寮撤案下畧

續日本紀曰延曆八年夏四月乙酉先是伊勢美濃
等關例上下飛驒函關司必開見至是勅自今以後
不得軌関貞文曰此文ヲ見テ函中ニ驛鈴傳符
ヲ雜納也サル事考ヘシ

百練抄曰給兼四年九月廿二日右近權少將平維
盛朝臣爲追討關東賊徒發向兼平天慶之例幽玄
之閑今度就嘉兼例所被行也不給節刀賜驛鈴

貞大案源平盛裏記平家物語ニ記セル所モ亦
百練抄ニ同シ盛裏記ニハ鈴ヲ兼ノ袋ニ入テ
人ノ頸ニ懸サセテ下リ
タル由見エタリ

禁秘抄 邦太 曰鈴印同記 貞丈云上引 後實通俊曰
 件鈴太有與物也 或六角或八角云々 已上上古少
 納言伺見欵

貞丈曰上古少細言伺見欵ノ八字ヲ以テ考ル
 = 後代至テハ鈴ヲ唯見物ニシテ人ナシサレハ
 置テ出レ用ル事ナキ見タル其制ヲ傳ヘ
 俊實後通等モル鈴ハ見シテ其形ヲ傳ヘ
 聞タルニナル故六刺ハシテ其制ヲ傳ヘ
 へ誤レリニ刺ハ公ト角ト音相似タル故紛レタル也
 鈴ノ既ニ前ニ公ト角ト音相似タル故紛レタル也
 タリ既ニ前ニ公ト角ト音相似タル故紛レタル也
 ラ見ルニ六角扁抄出シ又シテ家藏ノ驛鈴ノ二
 篆書シテ鑄付タリ其腹背ニ驛鈴ノ二字ヲ
 實俊通カテ説依テ造レル也又驛鈴ノ二字ヲ
 月抄ノハ却テ疑ハシ且刻ナレ其作者唯禁
 秘抄ノ事ヲ知ラシテ内裏儀式等ヲ見ス
 刺數アル事ヲ知ラシテ内裏儀式等ヲ見ス

萬葉集 八曰先妻不待夫君之喚使自來時作歌一

首 貞丈曰此哥越中守大伴宿禰家持作也此

左夫流兒我伊都伎之等能爾須受可氣奴波由麻

久之禮利佐刀毛等騰呂爾 貞丈云ハユマハ

仙覺律師抄 又永成曰さふることハ遊行女婦乃

字也 貞丈云万葉ノ けぬそいま くれり

とハ官使乃ゆきま宿てる所を驛路とつれも

いまりしむり官より鈴を賜ふれを志

るし少く驛へゆき鈴をみまへて宿まら也

るし少く驛へゆき鈴をみまへて宿まら也

るし少く驛へゆき鈴をみまへて宿まら也

國王七の鈴とて川七道へ使、もすよハ官使
小へ給もる也七鈴のあつよ一ハらる乃けた
る給ありそれと給うぬる使ハ道乃間らる川
舟て抱あしとひつてさうしてか此鈴をふ
里あすをすて馬乃もみれあたと供をるを
もいと云あるアアといと同韻乃故也志の
るに家持乃宿祢 貞丈云家持ハ非也
尾張少咋と云人也越中よつて
里て在國の間あそい娘さるるを思ひけりよ
家持ハ先妻 貞丈云家持ハ妻ハ
非也少咋ハ妻あり不侍夫君之喚使
自來りこれハ鈴けぬまいまうこれりといふ

なり 貞丈云少咋カ先妻ノ事ヲ家持カ哥ニ
作レル也仙覺抄誤レリ仍今是ヲ正ス

堀川院百首和哥曰 関 匡房

相坂乃園此せきをりいとそよむまや流さひ
み流きとゆるを

同次郎百首和哥曰 鈴出 仲実

おのまら此不破乃せき屋のすむしとむまや
ふるるとおひひけけうけ

貞丈云むまやハ驛舎あり
鈴を驛路乃流をりなり

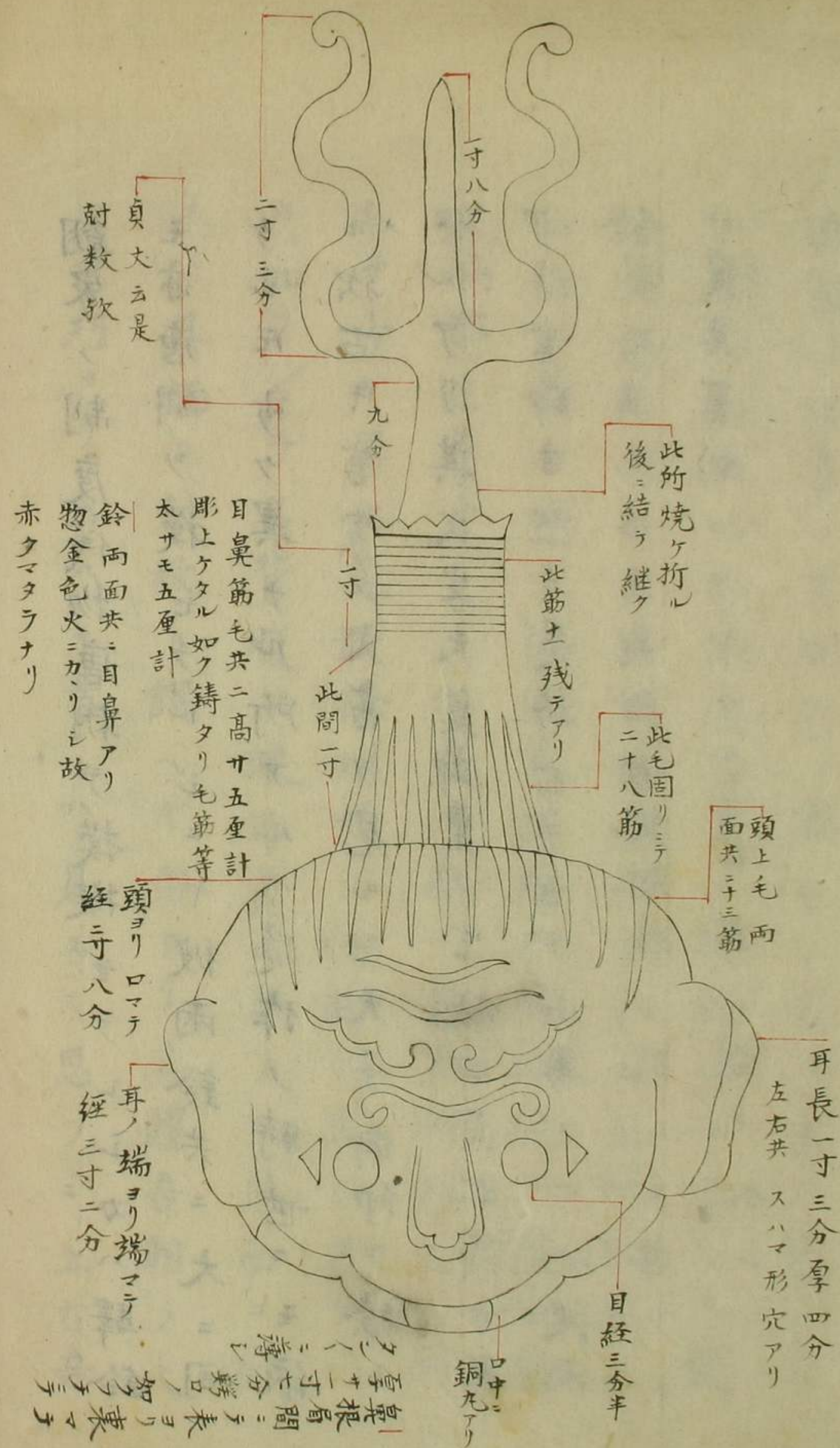
後本や古書 其間 研心 園 昔ハ本又良ヤ
貞丈曰公今内東刻在善ハ故良報後ハ心校

貞丈曰公式令内裏伎式等ノ所見驛鈴ニハ必尅
数有リ古書ニ其制形ヲ圖セシ者ヲ未タ見サレ
ハ詳ナラス今世此處波處ニ驛路鈴ト稱シテ藏
ル者希ニ有レ氏其制形各同カラス且尅数モ毎
シ信シ難シ唯下總國葛飾郡吾孀神祠ト常陸國
鹿嶋郡正等寺ト此兩處ニ藏ル者其制形大ニ同
シテ少キ異也其形狀蝌蚪ノ後脚ヲ生シタラシ
カ如クニテ其背腹ニ眼耳鼻口アリテ鬼面ニ似
タリ其柄ニ尅数ト謂ヘキ者アリ其體吾朝ノ人
ノ意巧ヨリ出ヘキ者トハ見ユス思フニ上古吾

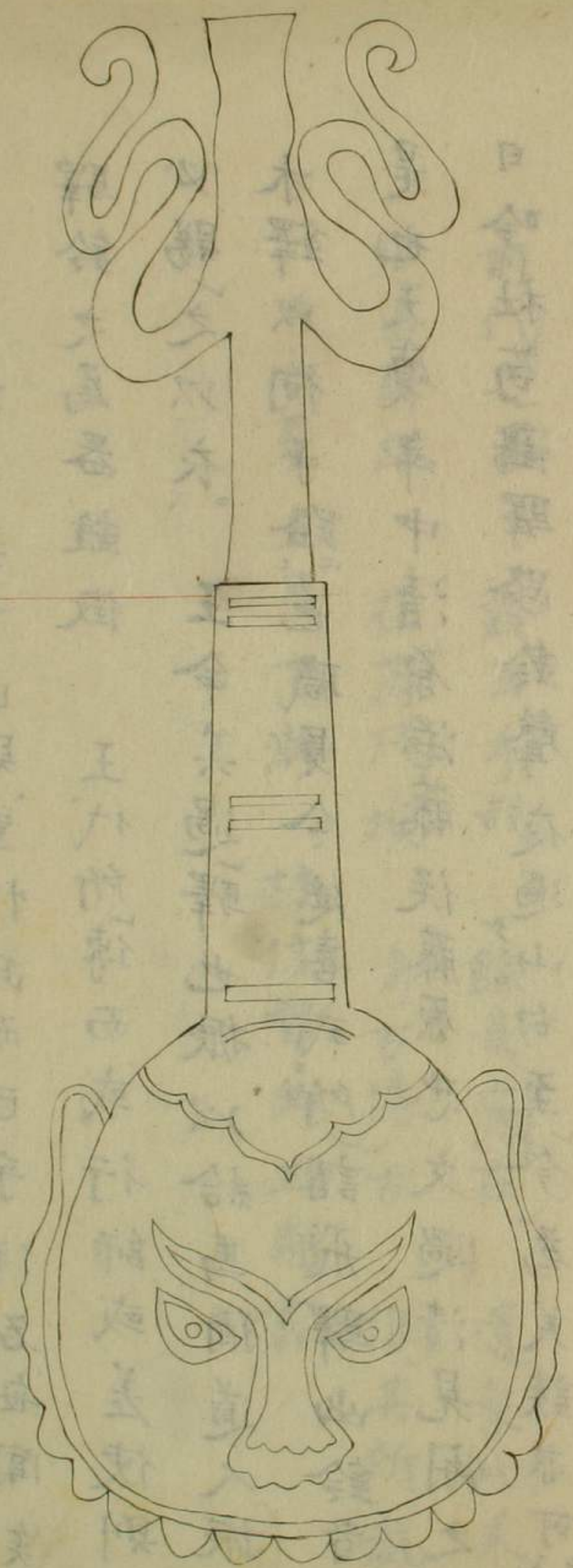
朝家ノ制度伎物唐朝ヲ模擬セラレシカハ驛鈴
モ亦唐制ヲ摸セラレシニヤ彼兩鈴共ニ大ニ同
ケレ氏少ク異ナル所アルハ造作ノ時世ニモ依
ル歟古キ官家ノ文書ヲ見ルニ天子ノ御印ヲ捺レ
タルアリ其文字天皇御璽ノ字様曲直肥瘦少異
アリ官印亦然リ是時世ニ依テ少異アル也彼兩
鈴之少異モ亦其類歟彼鈴尅数ト謂ヘキ者アレ
ハ是其真物ニモヤアルラシ左ノ圖ノ如シ

下總國葛飾郡吾孺神祠所藏驛路鈴圖

法蓮密寺



常陸國鹿嶋郡正等寺所藏驛路鈴圖



貞丈云此筋上中下合テ五ツ 是耐敷欵

下對西... 其... 山... 王... 目... 鼻... 筋... 毛... 共... 高... 廿... 五... 厘... 計... 彫... 上... ケ... タ... ル... 如... ク... 鑄... タ... リ... 毛... 筋... 等... 太... サ... モ... 五... 厘... 計... 鈴... 兩... 面... 共... ニ... 目... 鼻... ア... リ... 惣... 金... 色... 火... ニ... カ... リ... シ... 故... 赤... ク... マ... タ... ラ... ナ... リ... 貞... 丈... 云... 是... 耐... 敷... 欵... 目... 鼻... 筋... 毛... 共... 高... 廿... 五... 厘... 計... 彫... 上... ケ... タ... ル... 如... ク... 鑄... タ... リ... 毛... 筋... 等... 太... サ... モ... 五... 厘... 計... 鈴... 兩... 面... 共... ニ... 目... 鼻... ア... リ... 惣... 金... 色... 火... ニ... カ... リ... シ... 故... 赤... ク... マ... タ... ラ... ナ... リ... 貞... 丈... 云... 是... 耐... 敷... 欵...

林信智所題鹿嶋正等寺所藏驛路鈴圖贊并序
先王之政足以徵於今者莫如器故其器存則其政
可傳而記焉其器已則豈惟政而已乎併名每聞矣
驛鈴之為器雖微王代所傳而或行師或差使則
必賜之以衣王命其過驛也振以給馬猶道人振
木鐸以徇于路也職員令延喜式所謂飛驒函鈴者
是也天慶年中清原滋藤從藤原忠文過清見聞之
日吟杜荀鶴驛路鈴聲夜過山句至今為美談亦可
以證矣然其器絕無而僅有者世無得而見焉常陸
國鹿嶋郡正等寺所藏其形勁正其製朴方圖以傳

諸好古者於是

昭代之文物燦然庶乎不熄也源

康懿君聞其圖有所感而請贊其首因贊曰

前代之器

鈴云乎哉

餘音安在

遺象此來

迢遙驛路

荏苒夙埃

考古博古

惟其所裁

壬子夏五月下澣

林信智馬玉甫書

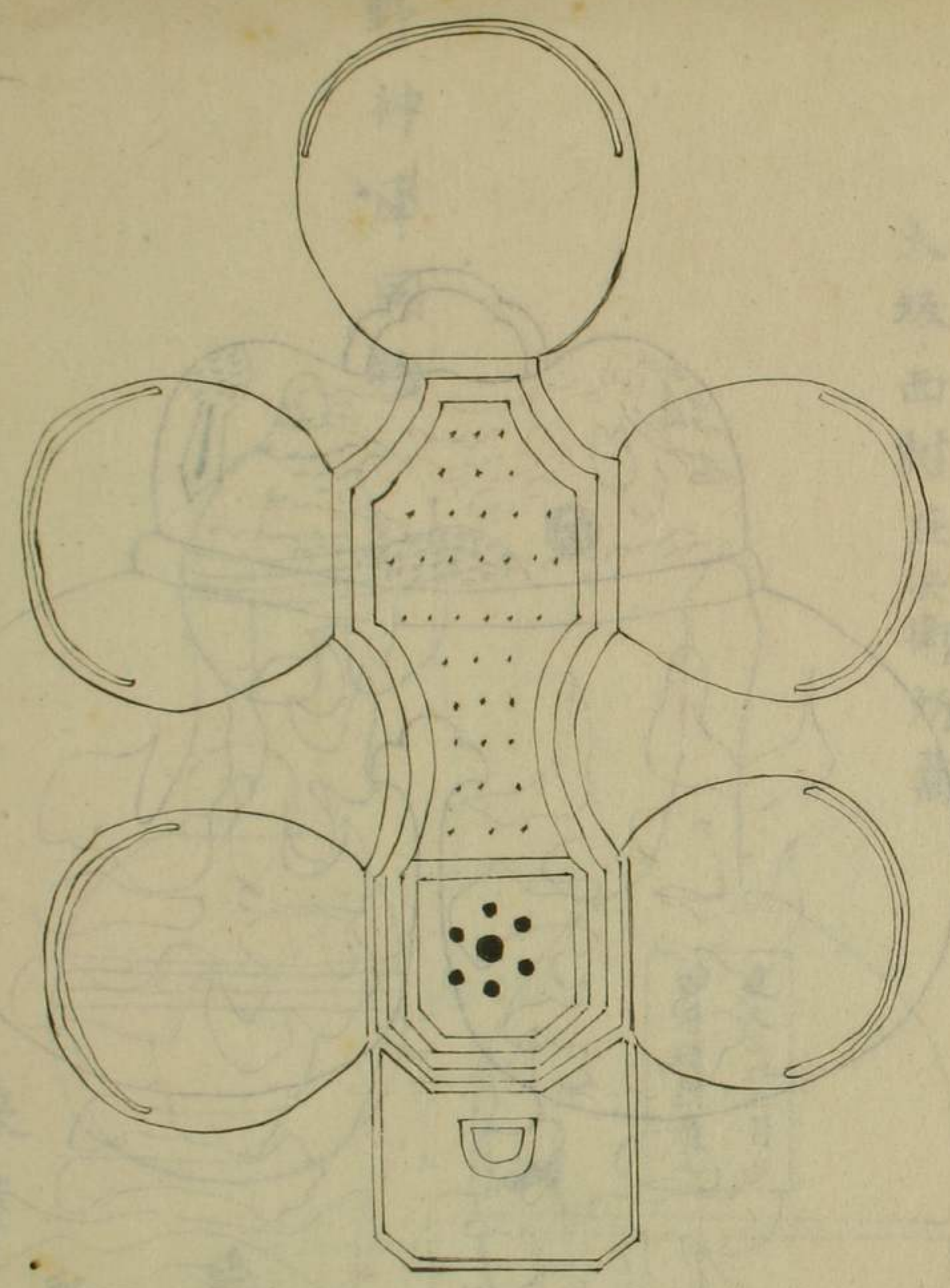
鹿嶋正等寺藏驛路鈴圖贊并序
林信智馬玉甫書

多小乃と傳へまゝありはゆまりの
 其のゆまりのゆまりのゆまりの

天明四年甲辰二月八日 伊勢守齋貞丈書

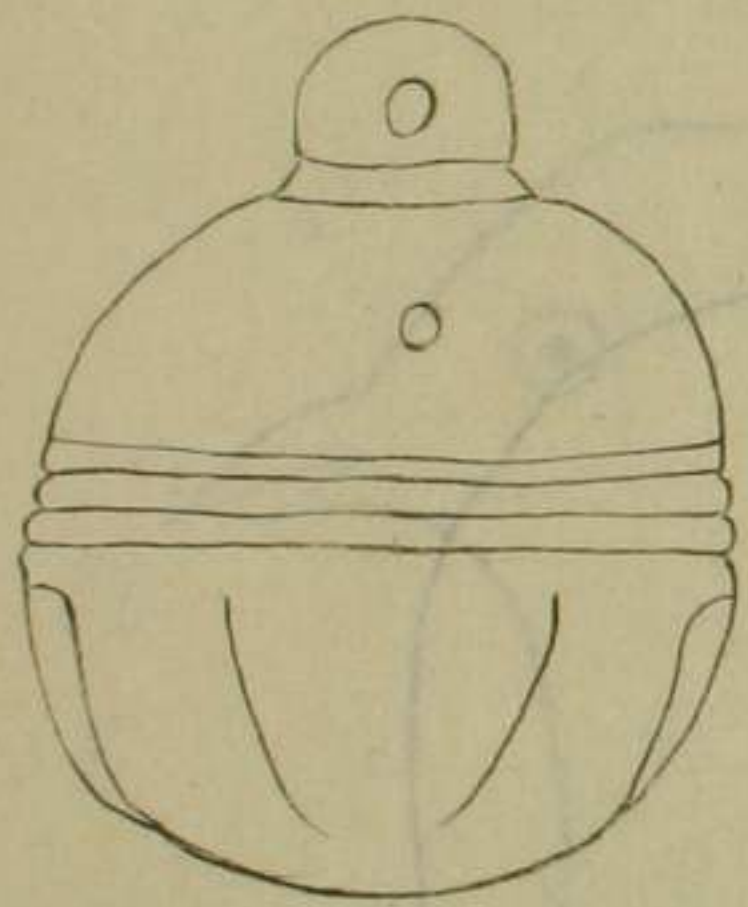
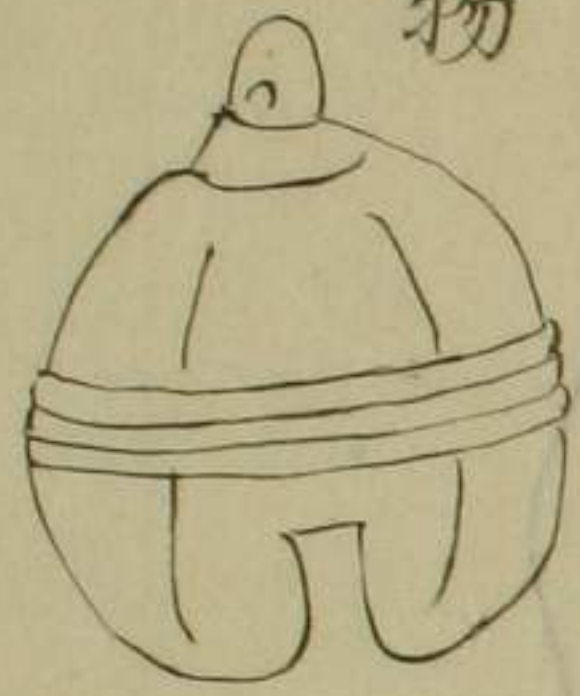
驛路鈴考終

房総志料ニ出ル圖甚惡敷故村上撫丸正物ヲ見テ形ヲ模ス左如シ



景文元年四月

北野神庫同物



建久三壬三月日
奉源賴朝造之

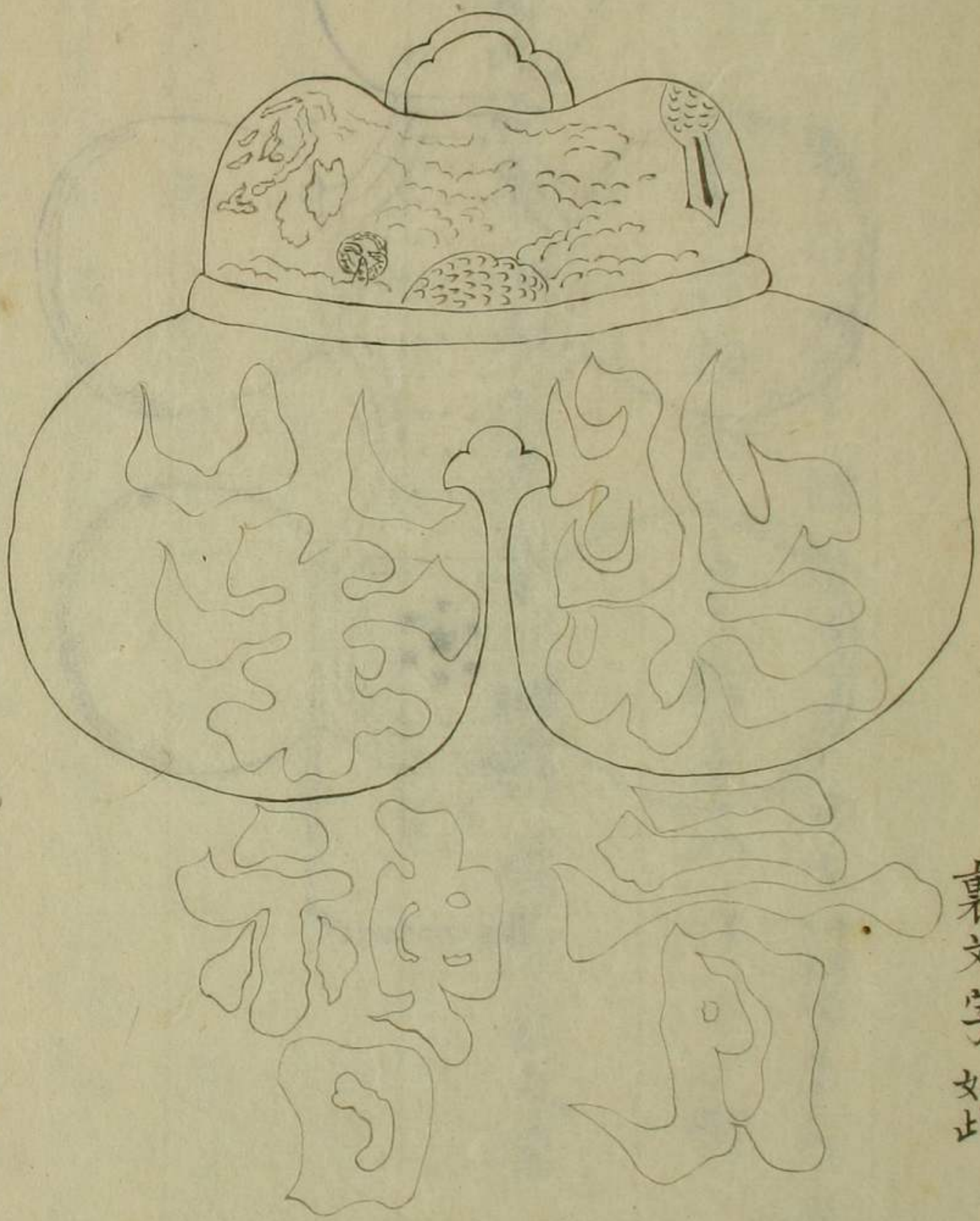
延喜古鈴

浪華

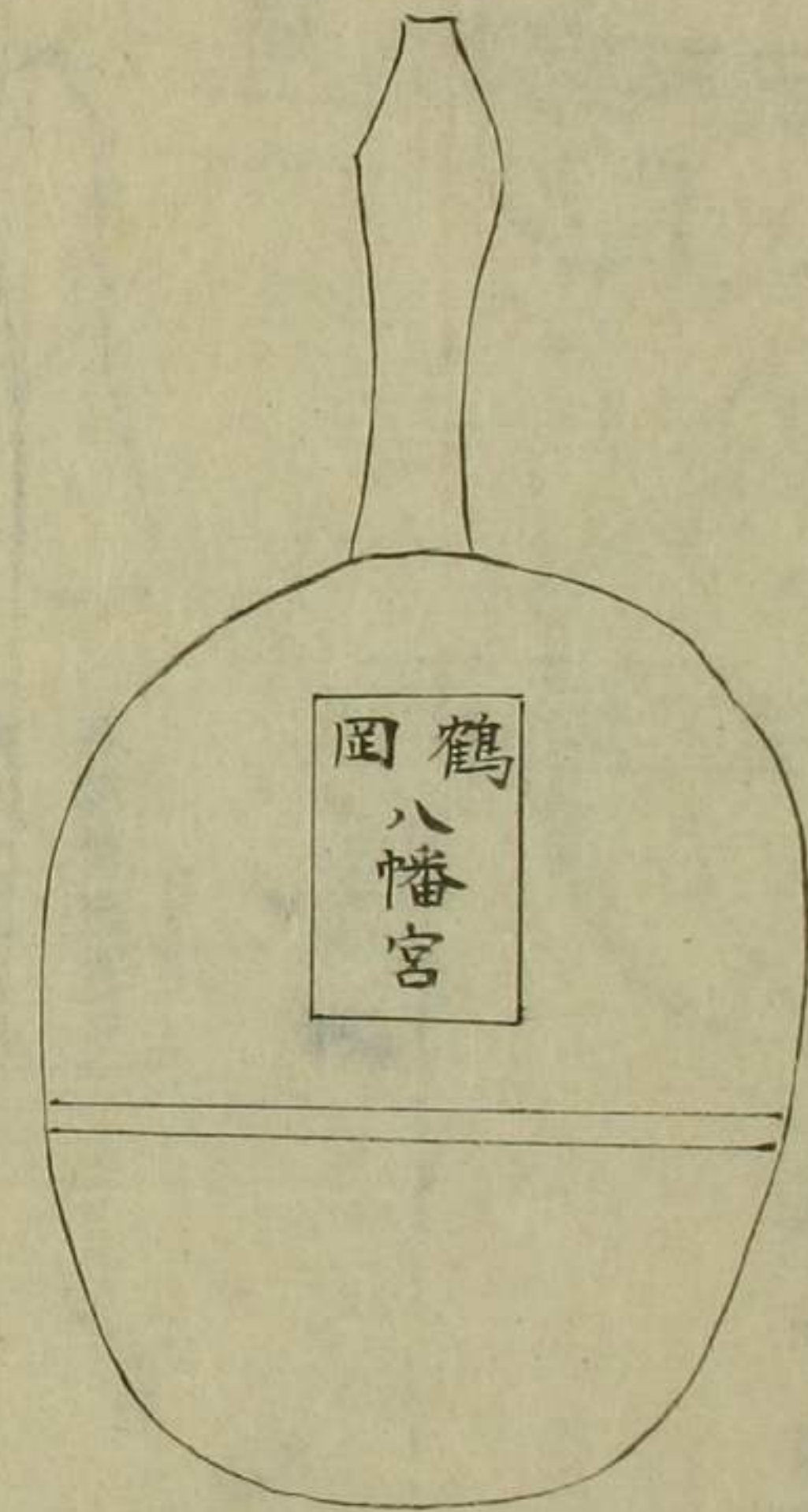
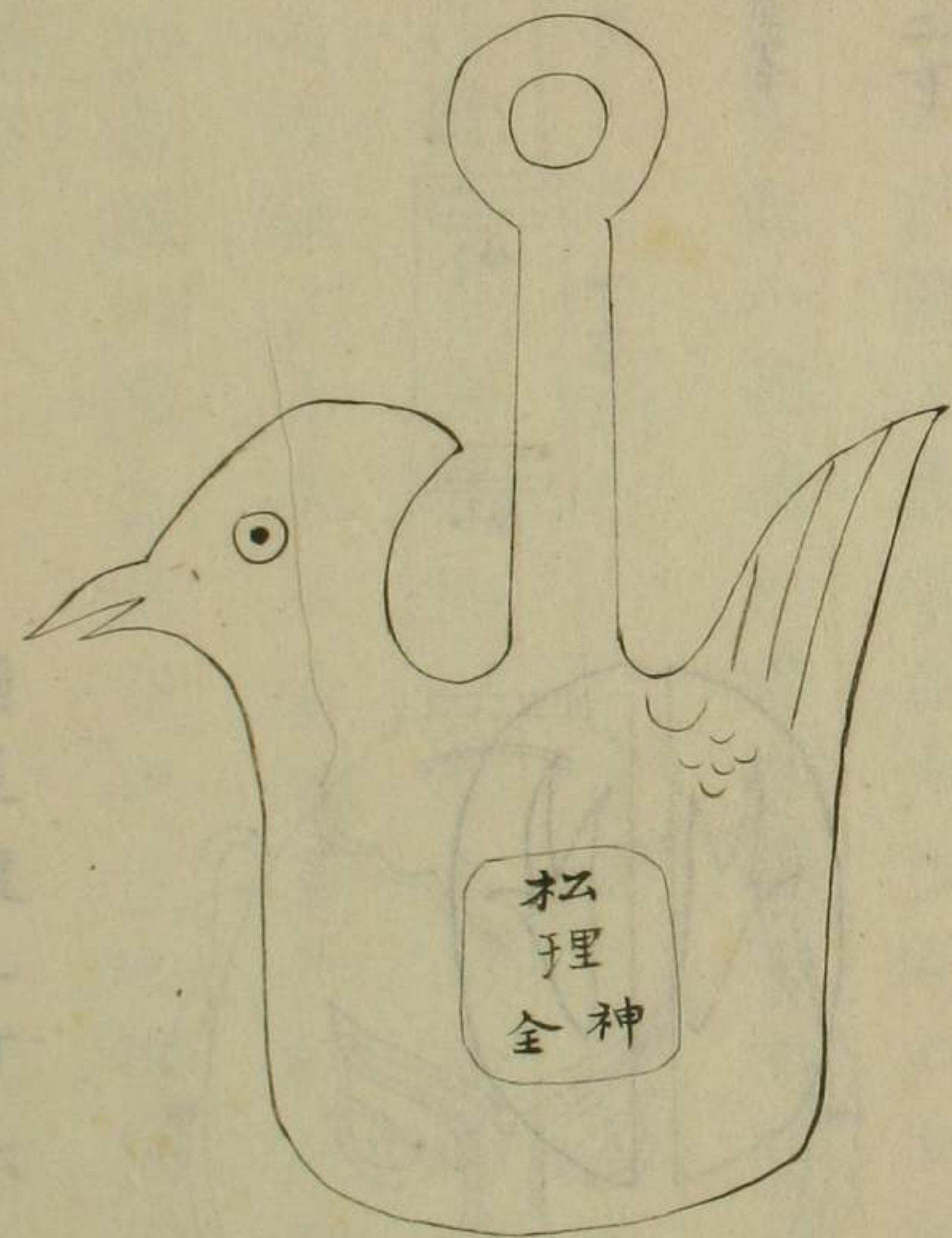
聖記內志作者五翁孫
并河誠所藏

大坂西村庄兵衛所藏

天明八年 正月廿日 肥前國 獵所於
平戶浦 得之 今有 鎮至号 獵所六外

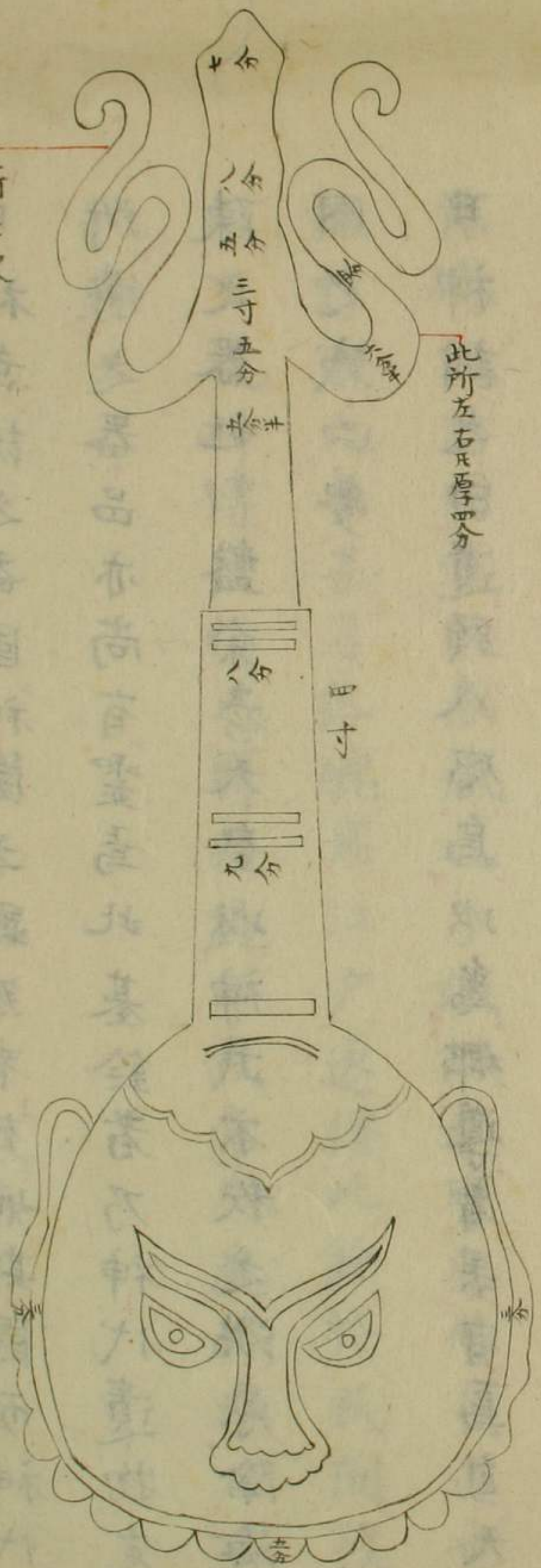


裏文字如此



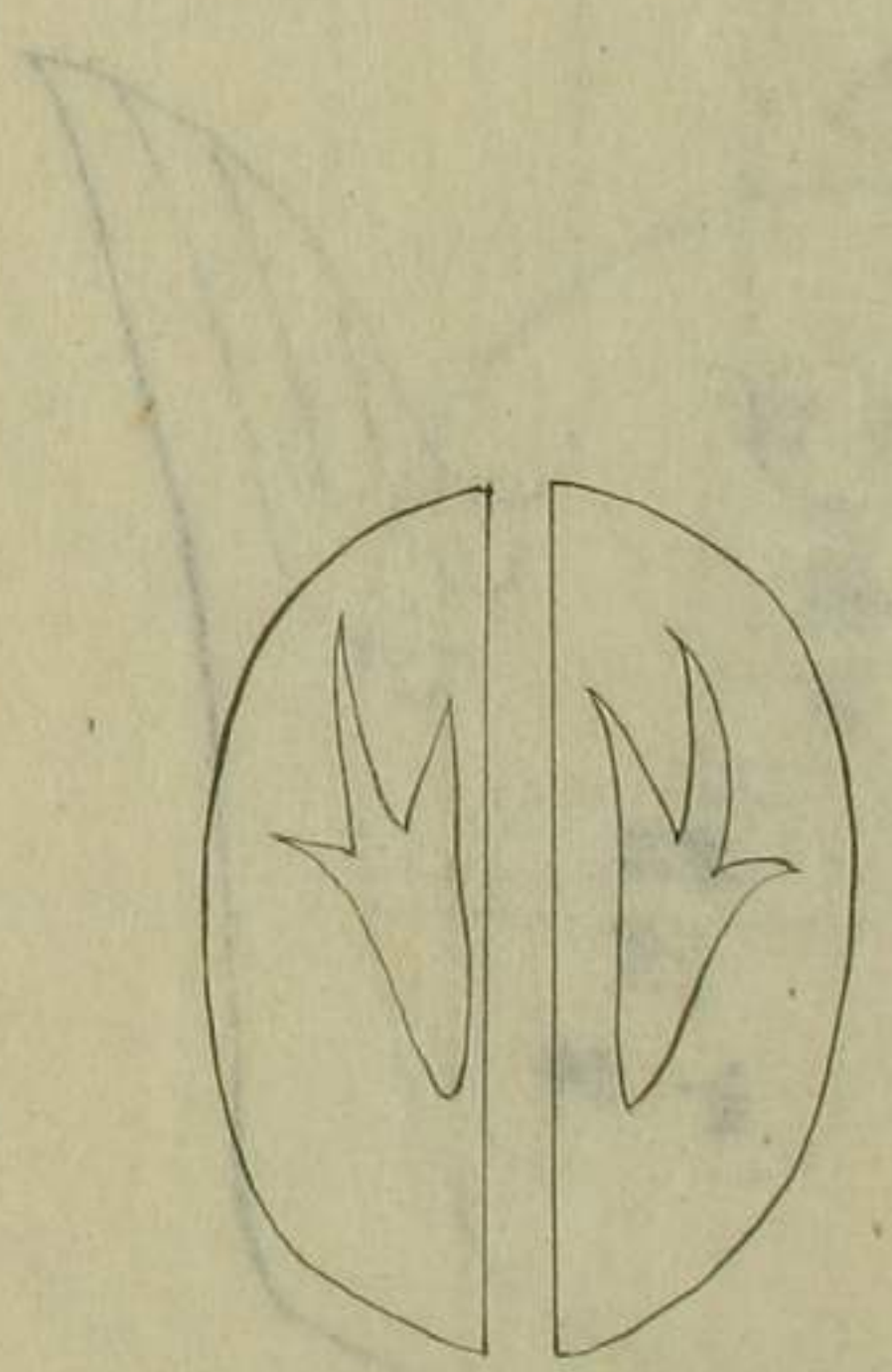
信濃國諏訪寶庫之鈴今所有市中之圖

惣長一尺二寸



橫差渡三寸六分半

豎三寸九分半



基鈴傳

豐芦原瑞穗國

日神_ニ岳_ニ統_テ之奇國_ニ神威_ノ之顯然_ト未有_レ如斯國_ニ而神代_ノ所傳_レ之器_品亦尚有靈焉此基鈴者乃神代遺物定陳之器也盤余考天皇以神武不殺之洪惠除海內之殘凶夢

日神訓之曰遺頭八咫鳥以為鄉導者果有焉自天翔降於爰尋鳥所嚮立基鈴為陳之標以征則萬方悉平厥為形也象之日氣為其用也猶異邦以綿菴

分部伍

矢長津

命閑別天皇嘗賞甲賀兼家之平

治越之凶徒之勲賜之兼家居江州水口城其裔為信陽諏訪國造示未藏之于諏訪社寶庫尚矣近世諏訪氏之曹某者落魄寓江戸遂傳此鈴於民間後人不曉神傳徒祊之驛路鈴弃哉常州鹿嶋社亦有此鈴云

洲方九十七代末

八洲宋女

